出品作家略歴

【生誕 110 年　長谷川青澄】

長谷川青澄（はせがわ・せいちょう、1916-2004）

長野県下水内郡飯山町（現・飯山市）生まれ。本名は義治。旧制飯山中学（現・飯山北高校）在学中に菊池契月の兄・細野順耳から日本画の手ほどきを受ける。1933 年、家族とともに上京。翌年、吉村忠夫に入門し大和絵を学ぶ。1944 年に郷里の飯山へ疎開。吉村の急逝後は中村貞以に師事する。1953 年、第 38 回院展に初入選。1962 年、日本美術院次賞を受賞する。1982 年に日本美術院同人、1989 年には日本美術院評議員となる。

今井映方（いまい・えいほう、1901-1997）

長野県上水内郡戸隠村（現・長野市）生まれ。本名は美武。高等小学校卒業後、画家を志し母とともに上京。1919 年に第 17 代狩野家に入門、1922 年以降は竪山南風の門下生として日本画を学んだ。1937 年、《秋》が第一回新文展に入選。1944 年に故郷の戸隠へ疎開して以降、亡くなるまで同地で過ごし、院展を発表の場として制作を続けた。

中島千波（なかじま・ちなみ、1945-）

長野県小布施町生まれ。父は日本画家・清之。東京藝術大学在学中の 1969 年、第 24 回春季院展に初入選。以後院展を中心に発表し、1977 年の第 62 回展で奨励賞を受賞する。1984 年、研究グループ「横の会」の結成に参加、グループ解散時まで出品する。1992 年、小布施に「おぶせミュージアム・中島千波館」が開館。1998 年、日本美術院を退院する。1994 年には東京藝術大学助教授、のちに教授となり、現在は名誉教授。

倉島重友（くらしま・しげとも、1944-）

長野県埴科郡倉科村（現・千曲市）生まれ。父は日本画家・丹浪。1971 年に東京藝術大学大学院を修了、同年の院展に出品し初入選。その後平山郁夫に師事して研鑽を積む。1974 年に院友となり、1986 年に奨励賞、2001 年には日本美術院大賞、天心記念茨城賞など受賞を重ねる。現在も院展同人として精力的に制作を続けている。

【疎開作家と県展のはじまり】

町田曲江（まちだ・きょっこう、1879-1967）

長野県下高井郡中野町（現・中野市）生まれ。本名は春之助。当初は児玉果亭に学び、1897 年に寺崎広業に師事、また同時期に白馬会洋画研究所で黒田清輝に洋画の指導を受ける。1907 年の東京勧業博覧会に《仏陀の光》を出品、一等金牌を受ける。同年の文展には《悲報に接したる仏徒の歩み》を出品し三等賞となる。1910 年にフランスへ留学し西洋美術を学ぶ。また帰国の途上でインドの仏教遺跡を巡る。仏教や歴史を題にとった作品を得意とした。

矢沢弦月（やざわ・げんげつ、1886-1952）

長野県諏訪郡上諏訪村（現・諏訪市）生まれ。本名は貞則。14 歳で上京、寺崎広業に師事した後、東京美術学校日本画科選科入学。卒業後は今川橋松屋呉服店意匠部に勤務しながら制作を続けた。1912 年、《熟果》が文展に初入選し、褒状を受ける。その後も官展を中心に活躍、1933 年第 1 回帝展で特選を受賞。1938 年には日本画院の結成に参画した。東京女子高等師範学校や東京美術学校で教鞭を執る等、教育者としても尽力した。

伊東深水（いとう・しんすい、1898-1972）

東京生まれ。本名は一。父が事業に失敗し、小学校を中退、看板工や活字工、石版画工となり水野年方門下の中山秋湖について日本画の手ほどきを受ける。1911 年に鏑木清方に師事し、翌年から巽画会や日本美術院に出品。1916 年に版元・渡邊庄三郎の下で絵師・彫師・摺師による分業制の新版画の制作に着手し、美人を題材とした版画の他、『近江八景』など風景版画も多数手掛けた。日本画においては美人画家として知られ、昭和期の帝展や日展で活躍した。

江崎孝坪（えざき・こうへい、1904-1963）

長野県高遠町（現・伊那市）生まれ。本名は孝平。前田青邨に師事し、1927 年の第 8 回帝展に初入選を果たす。1941 年、第 4 回新文展で特選を受賞。戦後は 1947 年の第 1 回日展出品の《手向け》でふたたび特選を受賞

するなど、官展を主な発表の場とした。強い線と明快な色彩が特徴的な人物画を多く描き、『太閤記』(吉川英治著)などの挿絵や、映画「七人の侍」といった映画の衣装考証、歌舞伎の舞台装置制作など、多方面で活躍した。

石井柏亭（いしい・はくてい、1882-1958）

東京生まれ。本名は満吉。父は日本画家・鼎湖。幼少期は鼎湖に日本画を学び、父亡きあとは浅井忠、中村不折に師事し洋画を学ぶ。1902 年に明治美術会の後身として結成された太平洋画会の会員となる。1907 年、創作版画を普及する目的で山本鼎、森田恒友と雑誌『方寸』を創刊。また、パンの会や日本水彩画会、二科会、一水会などを創立、日本の近代美術の発展に大いに貢献した。帝国美術院、帝国芸術院、日本芸術院会員。

須山計一（すやま・けいいち、1905-1975）

長野県下伊那群鼎村（現・飯田市）生まれ。太平洋画会研究所で学び、1925 年、東京美術学校に入学する。在学中に日本漫画家連盟と日本プロレタリア芸術連盟に加盟、卒業後はプロレタリア美術家同盟の書記長を務める。1933 年からの約 2 年間の獄中生活以降は社会主義活動から離れ、絵画制作を再開する。1942 年、双台社に参加、1946 年の信州美術会創立に携わり、また一水会会員に推挙される。信濃美術会や日本漫画家協会の結成にも参与した。

小山敬三（こやま・けいぞう、1897-1987）

長野県北佐久郡小諸町（現・小諸市）生まれ。上京後川端画学校で藤島武二に学ぶ。1918 年の二科展で《卓上草花図》などにより初入選。1920 年に渡仏、C.ゲランに師事する。滞在中サロン・ドートンヌで入選し、1926 年、会員に推挙される。帰国後二科会会員となるも 1936 年に退会、石井柏亭らと一水会を結成する。1959 年、日本芸術院賞を受賞、のちに日本芸術院会員となり、日展理事も務めた。1975 年、文化勲章受章。

篠原新三（しのはら・しんぞう、1889-1966）

長野県上水内郡芹田村（現・長野市中御所）生まれ。長野商業学校（現・長野商業高等学校）在学中に、長野師範学校で開催された大下藤次郎、丸山晩霞を講師とする水彩画講習会に参加。新しい絵画に魅了され、1909 年の同校卒業後、上京して日本水彩画会研究所に入所。1913 年には日本水彩画会の創立に参加、南薫三にも師事した。1915 年に文展に初入選して以降は、郷里での活動を続ける。戦後は制作の傍ら、県展や北信美術会、日本水彩画会長野支部の創立を担い、県内美術の振興に大きく貢献した。

石井鶴三（いしい・つるぞう、1887-1973）

東京生まれ。父の石井鼎湖、長兄の柏亭はともに画家。不同舎に入り小山正太郎に学ぶ。1905 年に東京美術学校へ入学し、1911 年の第 5 回文展に入選。1913 年に研究科を修了したのちは日本美術院研究所で学ぶ。1915 年の再興第 2 回院展に《力士》を出品し院友となる。日本美術院を中心に彫刻家として活躍するかたわら、創作版画協会の設立に携わり、また新聞小説の挿絵を手掛けるなど多彩な活動が知られる。

渡会意士（わたらい・よしひと、1939-2008）

長野県東筑摩郡坂北村（現・筑北村）に生まれる。県立松本深志高校から信州大学教育学部美術科を卒業。深志高校定時制、松本県ヶ丘高校を経て深志高校教諭になった。はじめ人体彫塑を手がけていたが、1966 年から石を使った作品に取り組み、1967 年、一陽会展に入選して特待。1968 年、《転》で一陽賞を受賞し、1973 年、一陽会会員になった。長野県展でも受賞している。

杉田禾堂（すぎた・かどう、1886-1955）

長野県松本市生まれ。本名は精二。東京美術学校鋳造科を卒業後、同校講師や商工省工芸指導所嘱託第2部長、大阪府工技師を歴任。農展・商工展で受賞を重ね、1922 年の平和記念東京博覧会美術展で銀賞牌、1924 年のパリ万国装飾美術工芸博覧会では銀賞牌を受賞する。1926 年、モダニズムを先導するグループ「无型」に参加。1929 年の帝展で特選を受賞する。以降帝展、新文展、日展の審査員をつとめ、1951 年、全日本工芸美術家協会の初代委員長に就任する。

北原三佳（きたはら・さんか、1895-1972）

長野県下伊那郡山本村（現・飯田市）生まれ。東京美

術学校鋳造科卒業、同研究科修了。在学中から農展（農商務省図案及び応用作品展覧会）に出品し入選する。1922 年、平和記念東京博覧会美術展で銀賞受賞、1931 年から 3 年連続帝展で特選を受賞し無鑑査となる。1935 年にはパリ万国装飾美術工芸博覧会において銀賞を受ける。1945 年、郷里近くに疎開し、その後諏訪に転居。以後、信州美術会副会長、諏訪美術会長を歴任、戦後の信州美術界に大きな功績を残した。

草間彌生（くさま・やよい、1929-2026）

長野県松本市生まれ。幼少期から幻視・幻聴を体験し、網目模様や水玉をモティーフにした絵画を制作。1948 年、京都市立美術工芸学校の最終学年に編入し、翌年卒業。1957 年、単身渡米。シアトルで個展を開催した後、ニューヨークに移る。以降、絵画、彫刻、パフォーマンスなどの多彩な分野で活躍。1973 年に帰国、東京に拠点を移す。1993 年、第 45 回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表に選ばれる。2009 年、文化功労者。2017 年には草間彌生美術館が東京に開館した。

川村驥山（かわむら・きざん、1882-1969）

静岡県生まれ。本名は慎一郎、別号に酔仏居士など。父・東江について書と漢籍を学び、1897 年に書家として独立、全国を行脚する。1925 年、書道作振会に参画、1932 年、東方書道会の創立に加わり、創立委員、董事審査員となる。1945 年、現在の長野市篠ノ井に疎開、以後定住する。1948 年の第 4 回日展では、新たに加わった書道部門の参事・審査員をつとめる。1951 年、書道界初の日本芸術院賞を受賞し、1962 年に日本芸術院会員となる。

【カンディンスキーとその時代】

ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）

旧ドイツ・ケーニヒスベルク生まれ。ベルリンとミュンヘンの女子美術学校で学び、マックス・クリンガーの影響で素描、版画の道へ進む。1899 年のドイツ美術展で『織工の蜂起』がメダルを獲得、同年ベルリン分離派に加わり、後に自由分離派を結成する。1904 年にパリへ向かい、アカデミー・ジュリアンで彫刻を学ぶ。1907 年、ヴィラ・ロマーナ賞を受賞、1919 年には女性として初めてプロイセン芸術アカデミー会員に任命される。労働者や反戦、家族を主題とした作品制作を貫き、晩年は反ファシズムの姿勢から発表の場を制限された。

杉浦非水（すぎうら・ひすい、1876-1965）

愛媛県生まれ。本名は朝武。東京美術学校日本画選科在学中、黒田清輝の知遇を得る。黒田によりもたらされたアール・ヌーヴォーの資料を見て図案家の道へ進む。1908 年に三越呉服店の勤務となり、数多くのデザインを手掛け三越のブランドイメージを牽引する。1924 年に日本初のデザイナー研究集団「七人社」を結成。1935 年には多摩帝国美術学校（現・多摩美術大学）の創立に関わるなど教育者としても活躍した。1955 年、日本芸術院恩賜賞を受賞。

広幡憲（ひろはた・けん、1911-1948）

秋田県生まれ。旧姓高橋、本名憲太郎のち憲導。1924 年上京、日本大学で洋画を学ぶが中退し、独自に絵画研究を進める。1935 年秋田に戻り記者となる。1937 年、藤田嗣治の壁画制作に際して助手を務め、再び上京。同年二科展に出品、初入選。1938 年同会に設けられた九室会の結成に参加し、翌年には絶対象派協会結成にも加わる。1946 年二科会再建第 1 回展で特賞受賞、会員となる。有機的な形態を用いた画面を特徴とし、前衛画家の旗手として知られた。

古茂田守介（こもだ・もりすけ、1918-1960）

愛媛県生まれ。画家の兄・公雄に誘われて上京し、猪熊弦一郎や脇田和に師事、大蔵省に勤めながら制作を続ける。1940 年の新制作派協会展で初入選、1946 年には同展作家賞となり、大蔵省を退官、1950 年に新制作派協会会員となる。アンデパンダン展や日本国際美術展にも出品を重ねたが、喘息が悪化し急逝。控えめな色調による独自の具象画を特徴とした。

池田満寿夫（いけだ・ますお、1934-1997）

旧満州国奉天（現・中国遼寧省瀋陽）生まれ。1945 年に終戦のため引揚げ、長野市に移る。上京し、1955 年に靉嘔らとグループ「実在者」を結成。翌年にデモクラート美術家協会に参加し、色彩銅版画の制作を開始。国際

版画展で受賞を重ね、1966 年ヴェネツィア・ビエンナーレ版画部門大賞を受賞。前年には日本人として初めてニューヨーク近代美術館にて個展を開催した。文筆にも優れ、1977 年には小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞を受賞。陶芸・映画等の分野でも幅広く活躍した。

浦野吉人（うらの・よしと、1936-）

長野県飯山市生まれ。1955 年、信州大学教育学部に入学。その頃上田市を中心に開催されていた絵画講習会・鹿苑会に参加、岡鹿之助より指導を受ける。 大学卒業後、美術教諭として勤務するかたわら制作に励み、1975 年、東京藝術大学美術部絵画組成教室へ内地留学し、絵画組成について学ぶ。同年、春陽会会員に推挙。1980 年に長野短期大学助教、1988 年には教授となり、2000 年に退職。その後 2003 年から 5 年間、春陽会理事に就任し、団体の運営や後進の育成に寄与する。今もなお真摯に油彩画に向き合い、自らの飽くなき芸術表現を探求し続けている。